

「身世」と「掩關」——秦觀の閑居をめぐって——

湯 浅 陽 子

【要旨】

北宋の「蘇門四学士」の一人である秦觀の、比較的若年期に当たたる故郷の高郵で閑居していた元豐元年（一〇七八）から七年（一〇八四）頃の詩文を主な対象として、自己と自己を取り巻く社会の関係についての思考を、日常における閑居をめぐる作品に現れる「身世」「掩關」の二つの語に着目して検討する。

「身世」は普通、「自分の一生」、「人生のなかで経験してきたことのすべて」の意として用いられ、また地位や名声の意でも用いられる。すでに先人の研究によって、盛唐期の杜甫詩には「身」（彼自身）と「世」（彼を取り巻く社会）との間の齟齬に苦しむ様が描かれ、中唐期の白居易詩における「身世兩相棄」から「身世兩相忘」への表現の変化を経て、北宋期の蘇軾詩の表現においては、自身と世の中とがかけ離れている状態を了解することにより、精神的な安定を得ることが可能になっていると指摘されているが、秦觀詩における「身」と「世」は、これらを踏まえつつ、眠りの中で「失われ、また眠りから覚めた時に「渺茫」としたものと感じられると描かれ、見通しのきかない頼りなさや不安感を漂わせている。

また、元豐元年秋の貢舉進士科に及第することができず、郷里の高郵に引きこもった秦觀は同年に「掩關銘」并序を制作しているが、「掩關」は、門をふさいで世間との交わりを拒絶することを意味し、ここには当時の秦觀の鬱屈や絶望を窺うことができる。また「掩關」という語は、六朝期以来ある場所が扉を閉ざすことによって社会から隔絶した状態にあることを表現し、特に東晉の陶淵明以降は世の中との応接を避ける隠者の閑居をイメージさせるものとされ、さらに中唐期の白居易がそれを自己の所謂「中隠」の状況を示す表現に用い、知識人の閑居のイメージとなっていたと考え

ることができる。

秦觀「掩關銘」もまた、このようなイメージの継承を踏まえて、当時の自己の思いを寓するにふさわしいテーマとして制作されたものであろうが、ここで描かれる「掩關」は、この語が従来持っていた社会との応接を拒絶する隠者の態度に倣う姿勢を示すものであると同時に、自分をこのような状況に置く現実社会への批判を含みながら、社会との応接を拒んだ個人的空間での生活や読書を楽しむものとしても描かれている。

「身」と「世」の両方について、見通しのきかない頼りなさや不安を感じさせるものとして描いていた秦觀にとって、閉ざした扉の内側は、社会から、またそれと対比して意識される自分自身の現実からも逃れることのできる安心できる場所であり、そのような「世」からも「身」からも解放される場所で、彼は精神的に自由な状態を得、古今の書物に親しむことができたと考えることができる。秦觀らの世代の詩文に表現される閑居は、修養としての色合いを強めるとともに、生き生きとした楽しさを陰らせていくが、これには彼らの世代が政府内の党派対立の影響を前の世代よりも若年から被り、自己実現が難しい状況に置かれたことが関係しているのではないだろうか。

はじめに

自己と自己を取り巻く社会とがどのような関係にあるのかについて思考することは、儒教の倫理によって社会への参画が要請された伝統的な

中国の知識人たちにとって、必然的なものであっただろう。さらに、知識人たちを主要な作者ならびに享受者とする中国の伝統的な詩文においては、長大な時間の中で、そのような思考は様々な形で表現され続けてきた。それらの表現には、濟世への積極的な意志や理想もあるが、挫折によりその実現が困難である場合の鬱屈や悲嘆、また個人的生活での自由な自分らしさの希求等を見ることができるといえる。

本稿は、北宋の「蘇門四学士」の一人である秦觀（字少游。一〇四九—一一〇〇）の、比較的若年期に当たる、故郷の高郵で閑居していた元豐元年（一〇七八）から七年（一〇八四）頃の詩文を主な対象として、自己と自己を取り巻く社会の関係についての思考を、日常における閑居をめぐる作品に現れる「身世」「掩關」の二つの語に着目して検討しようとするものである。秦觀の詩文には先駆けとなる世代の思考、あるいはそれ以前の長い時間の中で継承されてきた思考の継承を認めることができるが、さらに彼の独自の思考がどのように現れ、またそれが何を意味するのかについて考えてみたい。

一、「身世」

（一）「身世」とは

まず、取り上げるのは「身世」という語である。主な工具書の類では、「身世」という語は普通、まず「自分の一生」、「人生のなかで経験してきたことのすべて」の意として説明され、しばしば用例として北周・庾信「哀江南賦」序（『庾子山集注』¹）卷二の「傳變之但悲身世、無處求生。」（傳變の但だ身世を悲しむのみにして、生を求むる處無し。）が挙げられている。この語を同様の意味で使用している宋代の例としては、王安石「寄王回深甫」詩（『王荊文公詩李壁注』²）卷三十六「顧

我面顏衰更早、恰君身世病還多。」（我が面顏の衰ふること更に早きを顧み、君の身世の病むこと還た多きを恰れむ。）を挙げることができる。また、南宋・范成大「淨光軒」詩（『范石湖集』³）卷十八の「身世只今高幾許、北峯渾共倚闌平。」（身世 只今 高きこと幾許ぞ、北峯渾て共に闌の平らかなるに倚る。）のように、この語は地位や名声の意で用いられることもある。

蘇軾の詩にしばしば「身世悠悠」という語句が表れることは、夙に山本和義氏『身世悠悠』のうた⁴によって指摘されている。この論文（二百四十三頁）で山本氏は、蘇軾の表現から溯った「身」と「世」との齟齬を詩に詠じたものとも早い例⁵として、劉宋・鮑照「詠史」詩（『文選』⁶）卷二十一の「君平獨寂漠、身世兩相棄。」（君平 獨り寂漠にして、身世 兩つながら相ひ棄つ。）を、李善注の「言身棄世而不仕、世棄身而不任。」（言ふところは 身は世を棄てて仕へず、世は身を棄てて任ぜず。）と併せて指摘されている。ここで指摘されている鮑照「詠史」で嚴君平の生き方を言う「身世兩相棄」は、李善の解釈に従うならば、嚴君平が世を捨て、世の方でも彼を棄てて官職に任命しないという意味となり、この詩句を継承する蘇軾らの詩に現れる「身世」も概ね同じ意味と解することができる。

さらに山本氏はこの論文の中で唐・杜甫詩の四例を検討して、杜甫が「身」と「世」との軋轢（二百四十五頁）に苦しみ、「生涯を通じて、『身世の拙なる』ことを嘆いた詩人である。」と説明され、その上で杜甫の場合と比較する形で、蘇軾詩の「身世悠悠」を、杜甫のような「身」と「世」との軋轢に苦しむことはなく、「身」と「世」とを努めて懸隔したものとして認識することで、自らのこころを平穩ならしめようとする（二百四十九頁）ものであると指摘されている。つまり、盛唐期の杜甫

はその詩に、彼自身と彼を取り巻く社会との間の齟齬に苦しむさまを描いたが、北宋期の蘇軾においては、自身と世の中とがかけ離れているという状態を了解することにより、精神的な安定を得ることが可能になっている、と考察されているのである。

また、山本氏はこの論文の中で、『身世悠悠たり』とほぼ等しい意味で『身世相忘る』の表現を用いることがある⁽⁵⁾（同）と指摘され、さらにこれに関わって、川合康三氏が「韓愈と白居易—対立と融和—」⁽⁶⁾（三百九頁）において、白居易の詩における「身世兩相棄」から「身世兩相忘」への表現の変化について指摘されていることを記されている。川合氏はこの論文の中で白居易の詩の表現に見られる変化について、『忘』という言葉によって一人の人間と周りの社会との対立関係が消え、自分一人の内部に生じる自足の歓びをうたう文学を白居易が創り出した」と指摘されている。白居易における発想と表現の変化を間に挟むことにより、苦痛に満ちた杜甫詩の「身世」から穏やかな諦観を含んだ蘇軾詩の「身世」への変化は、より説明しやすくなるであろう。

（二）秦觀の「身世」

では、秦觀詩において「身世」の語を用いた類似の表現はどのように現れているのだろうか。秦觀詩に見ることのできる最も早期の例は、元豐二年（一〇七九）三月に、それまで知州事として徐州に在任していた蘇軾が知湖州に移る旅に同行して金山寺を訪れた際に制作された、次に挙げる「次韻子瞻贈金山寶覺大師」詩（『淮海集箋注』⁷ 卷八）である。

雲峯一變隔炎涼	雲峯	一變して	炎涼を隔て
猶喜重來飯積香	猶ほ喜ぶ	重ねて來たり	積香を飯するを
宿鳥水干迎曉鬧	宿鳥	水干に曉を迎へて	鬧 <small>さわが</small> しく
亂帆天際受風忙	亂帆	天際に風を受けて	忙し

青鞋踏雨尋幽徑	青鞋	雨を踏みて	幽徑を尋ね
朱火籠紗語上方	朱火もて	紗に籠め	上方に語る
珍重故人敦妙契	珍重す	故人	妙契に敦きを
自憐身世兩微茫	自ら憐む	身世の兩つながら	微茫たるを

ここで秦觀は、食事のふるまい、水上の眺め、以前の題壁詩を大切に保存している様子などの、金山寺で実際に見たものや体験したことを詩中に読み入れ、それらから得た感慨として、「身」と「世」とが互いに「微茫」であることに心をひかれると述べている。

この「微茫」は、かすかではつきりしない、ぼんやりしているさまを言う語であり、例えば陳子昂「感遇詩」其二十六（『陳子昂集』修訂本⁸ 卷一）「巫山綵雲沒、高丘正微茫。」（巫山 綵雲沒し、高丘 正に微茫たり。）、李白「惜餘春賦」（『李太白全集』⁹ 卷一）「試登高而望遠、極雲海之微茫。」（試みに高きに登りて遠きを見、極雲海の微茫たるを極む。）、では、雲に包まれた高い山や雲海が広がる様子の表現に用いられているが、ここではこの語を、脱俗の場である金山寺において、「身」（自分）と「世」とが遠く離れ、互いの存在がぼんやりとしたものとしか感じられないという意に用いている。

詩題にあるように、この詩は蘇軾の作に次韻したものだが、次に示すこの時の蘇軾の作「余去金山五年而復至、次舊詩韻贈寶覺長老」詩（『蘇文忠公詩合註』¹⁰ 卷十八 以下では『合註』と略称する。）には、「身世」の語は用いられていない。

誰能斗酒博西涼	誰か能く斗酒して	西涼を博くせん
但愛齋廚法鼓香	但だ 齋廚	法鼓の香しきを愛づるのみ
舊事眞成一夢過	舊事	眞に一夢の過ぐるを成し
高談爲洗五年忙	高談	爲に五年の忙しきを洗ふ

清風偶與山阿曲 清風 偶たまたま 山阿の曲に與にし

明月聊隨屋角方 明月 聊か屋角の方に隨ふ

稽首願師憐久客 稽首して師に願ふ 久客を憐れみ

直將歸路指茫茫 直ちに歸路を將て茫茫たるに指さんことを

ここでの蘇軾は、過去における訪問を一時の夢のようだと振り返り、それから五年間の忙しさが、今回ここを再び訪れて寶覺長老と語ること
で洗い流されると述べている。さらに五、六句目では金山寺の清風と名
月を愛で、末尾の句の「茫茫」について、南宋・施元之が注するように
韓愈「游青龍寺贈崔大補闕」詩（韓昌黎詩繫年集釋¹¹）卷五の「桃
源迷路竟茫茫」（桃源の迷路 遂に茫茫たり）を踏まえると解するならば、
寶覺長老に対して、自己が長らく旅人であることを思いやり、迷路のよ
うに判然としない路程をすぐさまく通り抜けていく帰り道を示してく
れるよう求めていることになる。つまりここでの蘇軾の感慨は、俗界を
ぼんやりとした路程の彼方にある場所として感じているという点で、秦
觀の「身世兩微茫」の表現するものに近いだろう。しかし、蘇軾は俗界
を自分が最終的には帰って行く場所として意識しているが、秦觀の意識
は「身」（自分）と「世」（俗界）とが遠く離れていることに向けられて
おり、両者の意識には異なる点も認めることができる。

秦觀がこの詩で「身」（自分）と「世」（俗界）とが遠く離れていると
いう感覚に言及しているのは、この感覚が蘇軾詩に特徴的な「身世悠悠」
という表現と重なるものであるからだろう。つまり、この次韻の原詩で
ある蘇軾の作品には直接「身世悠悠」という語句は使用されていないが、
秦觀はこの語句が彼に特徴的なものであると考えていたからこそ、ここ
で「身」と「世」の乖離に言及したのであろう。

先に触れたように、山本氏の論文では、蘇軾が「身世悠悠たり」と

四

ほぼ等しい意味で『身世相忘る』の表現を用いることがある（同）と
も指摘されており、さらに川合氏の論文では、白居易の詩における「身
世兩相棄」から「身世兩相忘」への表現の変化について、『忘』という
言葉によって一人の人間と周りの社会との対立関係が消え、自分一人の
内部に生じる自足の歎びをうたう文学を白居易が創り出した（三百九
頁）と指摘されていた。ここでは、川合氏の論文では引用されていない
白居易「詠興五首」池上有小舟（『白氏文集』卷六十二）の一部分を
一例として挙げ、その内容を確認しておきたい。なお、朱金城箋校『白
居易集箋校』卷二十九（千九百九十九頁）によれば、この作品は大和
七年（八三三）、太子賓客分司として洛陽履道里に居住していた六十二
歳の時の作とされる。この詩の前半では、洛陽履道宅の庭園を構成する
様々なものが齎す心地よさをひとつひとつ具体的に列挙し、詩の後半で
は、その中に在る自分の心境を次のように述べている。

身閑心無事 身は閑に 心は無事にしして

白日爲我長 白日 我が爲に長し

我若未忘世 我 若し未だ世を忘れざれば

雖閑心亦忙 閑なると雖も 心は 亦 忙ならん

世若未忘我 世 若し未だ我を忘れざれば

雖退身難藏 退くと雖も身は藏ること難からん

我今異於是 我 今 是に異なり

身世交相忘 身 世 交相こももひ忘る

快適な我が家で心身はくつろいだ状態にある。このような状態にあつても、もしも自分が「世」を忘れないなら心はやはり忙しくなってしまう、「世」が自分のことを忘れないなら、世の中から身を引こうとしても隠れていることは難しいだろう、しかし、今の自分はそうではなく、

「身」(自分自身)と「世」とがともに忘れあっている、だからこそこのような状態が可能なのだ、と白居易は述べている。

白居易以降の唐詩から「身と世とがともに忘れあう」という意味の詩句を拾い出すと、次のような例を挙げることができる。

一從身世兩相遺 一たび 身世 兩つながら相ひ遺れしより
往往關門到午時 往往にして門を關ちて午時に到る
想得俗流應大笑 想ひ得たり 俗流 應に大笑すべし
不知年老識便宜 年老を知らずして便宜を識ると

(李涉「山居」詩(『全唐詩』卷四百七十七))

陵陽北郭隱 陵陽 北郭の隱

身世兩忘者 身世 兩つながら忘るる者なり

蓬蒿三畝居 蓬蒿 三畝の居

寬於一天下 一天下よりも寬し

(杜牧「贈宣州元處士」詩(『同』卷五百二十一))

これらはいずれも人界を離れて暮らす隱者の生活を描いたものであり、また杜牧「題桐葉」詩(『同』卷五百二十一)「莊叟彭殤同在夢、陶潛身世兩相遺」(莊叟 彭殤 同しく夢に在り、陶潛 身世 兩つながら相ひ遺る。)は、陶淵明を「身」と「世」とをどちらも忘れた状態にある人物として描いている。これらの例において「身世兩相忘」は、隱逸者が社会と自己とに対する際の態度として把握されていると考えることができる。

さらに白居易の「身世兩相忘」及びそれに類する表現は、その後の北宋期における白居易という人物とその詩への関心の高まりのなかで、詩句の中に現れている。例えば、宋初における白体詩の流行の中心的な人物である王禹偁(九五四—一〇〇一)の「聞鶚」詩(『王黃州小畜集』¹³⁾)

卷五)には、

鳳來非我慶 鳳來たるも我が慶びに非ず
鶚集非吾殃 鶚集ふも吾が殃ひに非ず
優游盡天年 優游として天年を盡くし

身世俱可忘 身世 俱に忘るべし

と、わが身のことも世の中のことも忘れ、ゆったりと天寿を全うしたいという願いが表現され、また、蘇舜欽(一〇〇八—一〇四八)「夏中」詩(『蘇舜欽集編年校注』¹⁴⁾卷四)には、

雨後看兒爭墜果 雨後 兒の争ひて果を墜とすを看
天晴同客曝殘書 天晴れ 客とともに殘書を曝す

幽棲未免牽塵事 幽棲 未だ塵事に牽かるるを免れず

身世相忘在酒壺 身世 相ひ忘るるは酒壺に在り

と、「身世相忘」の状態になれるのは酔中のみだと述べている。

このように、北宋中期までの時期においても、白居易の「身世兩相忘」という発想と詩句とは知識人たちに継承されていたと考えることができるが、本稿で検討の対象としている秦觀の詩においても、やはりこれに類する表現を見ることができる。例えば、すでに挙げた「次韻子瞻贈金山寶覺大師」詩の後で秦觀が制作した「同子瞻參寥游惠山三首」詩(『淮海集箋注』卷四)は、先の詩と同様に蘇軾とともに惠山を訪れた際に蘇軾の作に次韻したものだが、次に示す其一「王武陵韻」に「身世」「忘」の語が用いられている。

輟權縱幽討 輟權 幽討を縱にし

籃輿入青蒼 籃輿 青蒼に入る

圓頂相邀迓 圓頂 相ひ邀迓し

旃檀燎深堂 旃檀 深堂に燎たり

層巒淡如洗 層巒 淡くして洗ふが如く

傑閣森欲翔 傑閣 森たりて翔ばんと欲す

林芳含雨滋 林芳 雨を含みて滋く

岫日隔林光 岫日 林を隔てて光あり

涓涓續清溜 涓涓として清溜を續け

靡靡傳幽香 靡靡として幽香を傳ふ

俯仰佳覽眺 俯仰す 佳き覽眺

悠哉身世忘 悠なるかな 身世忘る

舟と駕籠とを乗り継いで恵山の緑に分け入り、燈明の灯った僧堂に至る。建物がかすむ峰々から飛び立つかのように聳え、雨上がりの花々はひととき香り、山の端の夕日は林のむこうから光を放ち、澄んだ水は滴り、花の香りがまたも漂う。ここでは、このような素晴らしい眺めを見回し、「遠く離れているものだ。自分自身も世の中も忘れてしまふ」と感興を表して篇を閉じている。ここで秦觀は、わが身と世の中の両方の存在を忘却してしまうと述べているが、先に見た詩と同様に、これもあり、次に示す蘇軾の原作「遊恵山」詩（『合註』卷十八 元豐二年）の末尾の表現を意識したものと考えることができる。

夢裏五年過 夢裏に五年過ぎ

覺來雙鬢蒼 覺め來たるに雙鬢蒼し

還將塵土足 還た塵土の足を將て

一步漪瀾堂 一たび漪瀾堂に歩む

俯窺松桂影 俯きて松桂の影を窺ひ

仰見鴻鶴翔 仰ぎて鴻鶴の翔ぶを見る

炯然肝肺間 炯然たり肝肺の間

已作冰玉光 已に冰玉の光を作す

虛明中有色 虛明にして中に色有あり

清淨自生香 清淨にして自ら香を生ず

還從世俗去 還た世俗より去り

永與世俗忘 永く世俗と忘れん

ここでも蘇軾は、既に見た彼の詩と同様に、杭州通判を離職してから五年間はさながら夢の中であつたと振り返った上で、白髪頭になった今、塵芥にまみれた地を歩きまわった足で、前には来なかつた恵山を訪れて、地上の松桂の影、空を飛ぶ鴻鶴の姿を目にして心の中が明るくなり、水や玉のように清らかな潤いのある光に満ち、その明るい空虚の中に清淨で香り高い形と色彩があるという境地を得たと述べている。さらに、末尾ではこのような境地を得ることができたのだから、この上は世俗から離れて永遠に世俗を忘れ、世俗からも忘れられないという願望を述べる。白居易詩において特徴的な「身世兩相忘」は、この蘇軾、秦觀の応酬においても意識されているのである。

秦觀詩での「身世」に関わる表現では、この「同子瞻參寥游恵山三首」詩 其一「王武陵韻」の「悠哉身世忘」の他に「忘」字を用いる例はなく、これに類する表現として、既に見た「次韻子瞻贈金山寶覺大師」詩末尾の「自憐身世兩微茫」に類似した次の二例を挙げることができる。

醉來豐瘠同 醉ひ來たれば 豐瘠 同じく

眠去身世失 眠り去れば 身世 失はる

二樂擅一亭 二樂 一亭に擅にし

夫子信超逸 夫子 信に超逸たり

（「李行中秀才醉眠亭」詩（『雲間志』¹⁶）卷下。『淮海集』に未収。『秦少游年譜長編』卷一 熙寧九年（一〇七六）五十頁に言及あり。）

北風吹老槐 北風 老槐に吹き

白日轉紙窗 白日 紙窗に轉ず

布衾一覺睡 布衾 一たび睡りより覺むるに

身世成渺茫 身世 渺茫たるを成す

〔幽眠〕詩（『淮海集箋注』後集卷一 『秦觀集編年校注』卷七 百四十四頁は元豐年間の「郷居期間」の作とする。）

その他、「送李端叔從辟中山」詩（『淮海集箋注』卷四）に、「與君英妙時、俠氣上參天。孰云行半百、身世各茫然。」（君と與にす英妙の時、俠氣 上りて天に參ず。孰か云はん 行 半百ならんとして、身世 各茫然たりと。）があるが、ここでの「身世」は李端叔と自分の各々の人生を指すものであろう。

秦觀詩の「身」と「世」は、白居易のように心地よい閑居において「忘れ去られるものではなく、眠りの中で「失」われ、眠りから覺めた時に「渺茫」つまり捉えどころのないぼんやりしたもの感じられると描かれている。白居易が「棄」を「忘」に改めたことについて、川合氏は、「不遇の恨みも消失し、それに代わって世とは無関係に、相互に無関心にあるところの自分自身に満足するという別の姿が浮かび上がってくる。」（三百九頁）と考察されているが、秦觀の「失」「渺茫」からは、白居易のような満足感を読み取ることはできず、むしろぼんやりとして見通しのきかない頼りなさや不安感を漂わせるものとなっている。そこで次章では、「身世」とは異なる語に着目し、秦觀の自身と世との関係について別の視点からさらに考えてみたい。

二、「掩關」

（一）「掩關銘」制作の経緯
秦觀は元豐元年（一〇七八）に「掩關銘」并序を制作している。以下

ではこの作品の内容と「掩關」という語に注目し、秦觀の自身と世との関係についてさらに検討したい。

元豐元年四月（『秦少游年譜長編』卷二に拠る。）、貢舉の受験のため汴京へ向かっていた秦觀は、その途上で、血縁関係にある孫覺（字莘老 一〇二八—一〇九〇）と李常（字公擇 一〇二七—一〇九〇）からの紹介を得て、徐州（現江蘇省徐州市）に立ち寄って当時知州事として当地に在任中の蘇軾に初めて面会した。辞去する際、秦觀は「別子瞻學士」詩（『淮海集箋注』卷四）を蘇軾に贈り、これに応えて蘇軾は「次韻秦觀秀才見贈、秦與孫莘老・李公擇甚熟、將入京應舉」詩（『合註』卷十六）を制作した。蘇軾のもとを發った秦觀は、さらに当時、簽書判官事として南京應天府（現河南省商丘市）に在任していた蘇轍（一〇三九—一一一二 蘇軾の弟）を訪ね、李常の書簡と自作の「泗州東城晚望」詩（『淮海集箋注』卷十）を贈り、これに対して蘇轍は「次韻秦觀秀才攜李公擇書相訪」詩（『樂城集』卷八）を制作して応えている。このような行動は秦觀のみに特異なものではなく、当時の貢舉受験者に習慣的に行われていた、受験前に有力者の推挽を求める行動である。

しかし、この時の秦觀の場合、それらはいい結果に結びつかず、彼は元豐元年秋の貢舉進士科に及第することができなかった。この不首尾を受けて、秦觀はこの後、元豐八年（一〇八五）五月の進士及第を経て、同年末に蔡州教授として赴任するまでの約七年間のうちの多くの時間を郷里の高郵（現江蘇省高郵縣）に引きこもって過ごすことになる。もともとこのような彼の状況を心配した蘇軾らからは、「次韻參寥師寄秦太虛三絕句時秦君舉進士不得」詩（『合註』卷十七）や書簡が送られており、また前章で見たように、蘇軾は知湖州赴任の旅に秦觀を同行させ、一緒にいくつかの仏教寺院を尋ねて詩の応酬を行っている。

高郵に引きこもった後の早い時期（清・秦鏞編、秦瀛重編『淮海先生年譜』¹⁷）は元豐元年の記事に、「先生退居高郵、杜門却掃、以詩書自娛、乃作『掩關』之銘。」と記す。『秦觀集編年校注』卷三十六は元豐二年の作とする。）に、秦觀は「掩關銘」（『淮海集箋注』卷三十三）を作成している。題名の「掩關」は、門をふさいで世間との交わりを拒絶することを意味し、ここには当時の秦觀の鬱屈や絶望を窺うことができるだろう。

（二）「掩關」とは

ここで題名とされている「掩關」という語は『文選』には見ることができないが、類似の表現の例としては、梁・沈約「學省愁臥」詩（卷三十）の「秋風吹廣陌、蕭瑟入南闌。愁人掩軒臥、高牕時動扉。」（秋風 廣陌に吹き、蕭瑟として南闌に入る。愁人 軒を掩ひて臥すに、高牕 時に扉を動かす。）の、憂いに沈む人物が「軒」（李善注・長廊也。）を「掩」（同・猶閉也。）い、居所をとぎして閉じこもると表現するものを挙げることができる。

また、『文選』には収められていないが、東晉・陶淵明「歸園田居五首」其二（『陶淵明集』¹⁸）卷二）には、故郷の田園に帰還した後の日常生活を言う「野外罕人事、窮巷寡輪軌。白日掩荆扉、虛室絕塵想。」（野外 人事罕にして、窮巷 輪軌寡なし。白日に荆扉を掩ひ、虚室に塵想を絶す。）があり、ここに描かれている仕官生活から離れて昼日中から自宅の扉を閉ざしている状態が、閑居のひとつの方法として、後世の意識に影響を与えたと思われる。

唐詩における「掩關」の語の早い例として、吳少微「怨歌行」（『全唐詩』卷九十四）の、

是時別君不再見 是の時 君に別れ 再び見えず

三十三春長信殿 三十三春 長信殿
長信重門晝掩關 長信の重門 晝 關を掩ひ
清房曉帳幽且閑 清房の曉帳 幽にして且つ閑なり
を挙げることができるが、これは寵愛を失った宮女たちを住まわせた漢の長信宮が、皇帝の住む宮殿から閉ざされていることを表現するものである。

外界から閉ざされた場所を表すこの「掩關」という語を、陶淵明の「掩荆扉」と類似の社会から隔絶した場所の表現に用いた早い例としては、次の錢起「歲初歸舊山」詩（『全唐詩』卷二百三十七）を挙げることができる。

欲知愚谷好 知らんと欲す 愚谷の好きを
久別與春還 久しく別るるも春と與に還らん
鶯暖初歸樹 鶯は暖かにして初めて樹に歸り
雲晴却戀山 雲は晴れて却つて山を戀ふ
石田耕種少 石田 耕種少なく

野客性情閑 野客 性情閑かなり
求仲應難見 仲を求むるも應に見ゆること難かるべし
殘陽且掩關 殘陽 且く關を掩はん

春の初めに帰郷した作者は、仲間を求めても会うことは難しいだろうと考え、黄昏時の光の中で門口を閉じようとしている。ここで「掩關」が行われるのは、同じく世の中から隔絶した場所ではあっても、宮中という特別な場所の宿直の場や宮女たちの居所ではなく、江湖の人である「野客」が故郷に営む個人的な住居である。

また、中唐期の盧仝には「掩關銘」（『同』卷三百八十九）の先例を見ることができ

蛇毒毒有形 蛇毒 毒に形有り

藥毒毒有名 藥毒 毒に名有り

人毒毒在心 人毒 毒は心に在り

對面如弟兄 對面すること弟兄の如し

美言不可聽 美言 聽くべからず

深於千丈坑 千丈の坑より深し

不如掩關坐 如かず關を掩ひて坐し

幽鳥時一聲 幽鳥 時に一聲あるに

蛇毒には形が、藥毒には名前があるが、人毒は心の中にあり、それと兄弟のように向かい合っている。美辭麗句は実は千丈の穴よりも深いものだから聞くな、それよりも門を閉ざして座り、物陰に身を潜めた鳥がふと一声あげるのを聞く方がよいと、盧仝は社会との応接を拒んで「掩關」を実行するよう勧めている。この作品の他には「掩關銘」の現存する作例を見ることができないので、秦觀がこの作品から触発されている可能性もあるだろう。

なお、本稿の前半で検討した「身世」をめぐる表現でもそうであったように、閑居に関わる白居易の思考が北宋期の文人たちに大きな影響を与えたことは言うまでもないが、白居易もまた詩の中で「掩關」という語を何度も使用している。そこで白居易における「掩關」について考える手がかりとして、「閉關」詩（『白氏文集』巻七）を概観してみたい。なお、汪立名本巻七所収のこの作品は、詩題の「閉」を「掩」に作り、『全唐詩』巻四百三十所収のテキストでは「閉」の下に「一作『掩』。」と注している。

我心忘世久 我心 世を忘れて久しく
世亦不我干 世亦 我に干めず

遂成一無事 遂に一も事無きを成し

因得常掩關 因りて常に關を掩ふを得

掩關來幾時 關を掩ひ來ること幾時ならん

髣髴二三年 髣髴たり二三年

著書已盈帙 著書 已に帙に盈ち

生子欲能言 生子 能く言はんと欲す

始悟身向老 始めて身の老いに向かふを悟り

復悲世多艱 復た世の艱きこと多きを悲しむ

迴顧趨時者 迴顧す 時に趨る者の

役役塵壤間 塵壤の間に役役たるを

歲暮竟何得 歲暮 竟に何をか得ん

不如且安閑 且く安く閑かなるに如かず

この詩は、江州司馬に左遷中の元和十二年（八一七）の作とされる（朱金城『白居易集箋校』巻七に拠る。）が、当時の白居易が自己と世との間に感じていた距たりを表現したものである。冒頭では前章で見た「身世兩相忘」に類する内容が提示されており、これらの語句の表現する内容が互いに関わるものであることが推測される。二、三年の「閉關」生活の間に白居易は著作に励み、生まれた子どもは話せるようになったが、その一方で彼は自らに老いが迫り来ることを実感し、世塵の中に奔走する人の姿にむなしさを感じて、現在の自己の閉鎖的な状況を肯定しようとしている。つまり、白居易の「閉關」生活は、彼に世の中との乖離や孤独を痛感させるものであったが、その一方で、自己の中に安らかに沈潜し、一步引いた視点から世の中を見渡すことが可能になったことで、著作等の豊かな実りを生み出す機会ともなり得たと感じられているのである。

さらに白居易の詩にはこの他にも次のような例を見ることができる。

欹枕不視事 枕を欹てて事を視ず

兩日門掩關 兩日 門 關を掩ふ

始知吏役身 始めて知る 吏役の身の

不病不得閑 病まざれば閑を得ざるを

（「病假中南亭閑望」詩（『白氏文集』卷五））

平旦起視事 平旦 起きて 事を視

亭午臥掩關 亭午 臥して 關を掩ふ

除親薄領外 薄領に親しむを除く外

多在琴書前 多くは琴書の前に在り

（「郡亭」詩（『同』卷八））

君若欲高臥 君 若し高臥せんと欲せば

但自深掩關 但だ自ら深く關を掩ふのみ

亦無車馬客 亦 車馬の客の

造次到門前 造次 門前に到る無し

（「中隱」詩（『同』卷五十二））

これらの詩句においては、門を閉ざすことにより世の中の喧騒から離れ、閑なる状態を得ることの喜びが表現されている。白居易が門を閉ざす契機となるのは病気であったり、またその日の業務の終了であったりするが、いずれの場合においても、閉ざされた私的空間の内部に引きこもることによって彼は世の中の煩瑣や彼に求められる立場から解放され、自由を得るのであり、そのような私的空間において、彼は穏やかに横たわり、琴や書物を楽しむことができ、彼はそこに喜びを感じているのである。

白居易以降の時期の唐詩にも「掩關」という語は使用されており、杜

会との応接を拒み隠逸を志向する人の行動であるという意味合いには大きな変化はない。例えば、姚合（七七九頃―八四六頃）「閑居遣懷十首」其十（『全唐詩』卷四百九十八）では、「拙直難和洽、従人笑掩關。不能行戶外、寧解走塵間。」（拙直にして和洽すること難く、人より關を掩ふを笑はる。戶外に行く能はざるに、寧くんぞ解く塵間に走らんや。）と、人となじめない自分は、扉を閉ざした生活を他人から笑われるが、外出することもできないのに、ましてや世間と交わることはできないと述べている。

（三）秦觀の「掩關」

このように、「掩關」という語は、六朝期以来、ある場所が扉を閉ざすことによって社会から隔絶した状態にあることを表現し、特に東晉の陶淵明以降は世の中との応接を避ける隱者の閑居をイメージさせるものとされ、中唐期の白居易がそれを自己の所謂「中隱」の状況を示す表現に用い、知識人の閑居のイメージとなっていたと考えられることができる。本稿で検討している北宋期の秦觀「掩關銘」もまた、このようなイメージの継承を踏まえて、当時の秦觀が自己の思いを寓するにふさわしいテーマとして制作したものであろう。

そこで次に、「掩關銘」及び序の記述から、閉ざした門扉の内側にいる秦觀の様子について検討してみたい。まず、序の部分では、この銘の制作の経緯が次のように説明されている。

元豊初、觀舉進士不中、退居高郵、杜門却掃、以詩書自娛、乃作「掩關」之銘。

元豊初め、觀進士に舉さるるも中らず、退きて高郵に居し、杜門却掃し、詩書を以て自ら娛しみ、乃ち「掩關」の銘を作る。

すでに述べたように、秦觀の高郵退居は貢舉の進士科に及第できな

かったことを受けたものである。秦觀がここで自らの日常生活を表現する「杜門却掃」は、門を閉じて交際を絶ち、掃除することを言うが、秦觀は元豐八年（一〇八五）の科挙及第まで続く高郵閑居期間中、知人に送った書信の中で自己の生活の様子を紹介する際、類似の表現をくり返している。

例えば、元豐元年（一〇七八）の冬（『淮海集箋注』附録一「秦觀年譜」、『秦少游年譜長編』による。）に蘇軾に「黄樓賦」を献呈した際の「與蘇公先生簡」其二（『淮海集箋注』卷三十）には、次のように用いられている。

頃蒙不問鄙陋、令賦「黄樓」。自度不足以發揚壯觀之萬一、且迫於科舉、以故承命經營、彌久不獻。比緣杜門多暇、念嘉命不可以虚辱、輒冒不韙、撰成繕寫呈上。

頃 鄙陋を問せざるを蒙り、「黄樓」を賦せしむ。自ら度するに以て壯觀の萬一を發揚するに足らず、且つ科舉に迫られ、故より承命經營するを以て、彌久しく獻ぜず。比 杜門の暇多きに緣り、嘉命の以て虚辱すべからざるを念ひ、輒ち韙^よからざるを冒し、撰成繕寫して呈上す。

ここでは、蘇軾からの依頼を受けながら、これまで科挙受験などの多忙により献呈できなかった徐州黄樓に寄せる賦を、「杜門」により暇な時間が増えたため制作したと伝えている。

さらに例を挙げてみよう。

自還家來、比會稽時事差少、杜門却掃、日以文史自娛。

家に還りしより來、會稽の時に比して人事 差や少なく、杜門却掃し、日に文史を以て自ら娛しむ。

（『與李樂天簡』、『同』卷三十 元豐三年（一〇八〇）春）

不肖之迹、雖復爲世所棄、而杜門謝客、頗得專意讀書、衡茅之下、有以自適。古語有之、「蘭生幽谷（原作「宮」）、不爲莫服而不芳。」某雖不敏、竊事斯語。

不肖の迹、世の棄つる所と爲ると雖も、杜門謝客し、頗る意を専らにして書を讀むを得、衡茅の下、以て自適する有り。古語に之有り、「蘭 幽谷に生じ、莫^もめて服するところと爲らざれば而ち芳^{すなは}しからず」と。某 敏ならざると雖も、竊かに斯の語を事とす。

（『與蘇子由著作簡』其二（『同』卷三十 「秦觀年譜」は元豐元年（一〇七八）冬、『秦觀集編年校注』卷二十九は元豐三年（一〇八〇）以降とする。）

近しい人々に宛てた書簡にくり返し現れるこれらの記述は、当時の秦觀が世間との応接を避け、もっぱら読書に耽り文藝と史学に親しむことを樂しみとしていた様子を伝えているが、同じような言葉がくり返されることから、自分がこのような姿勢で日々を過ごしているということに対する秦觀の強い拘りをとらえることができるのではないだろうか。

ここで用いられている「杜門却掃」という語の早い時期の用例としては、『魏書』¹⁹卷九十、「北史」卷三十三の李謐傳の、李謐が延昌四年（五一五）に三十二歳で卒した後、孔璠ら學官四十五人が李謐を称えた上書中の語句を挙げることができる。

毎曰、「丈夫擁書萬卷、何假南面百城。」遂絶跡下幃（『北史』作「帷」）、杜門却掃、棄產營書。手自刪削、卷無重複者四千有餘矣。猶括次專家、搜比讜議、隆冬達曙、盛暑通宵。雖仲舒不闢園、君伯之閉戶、高氏之遺漂、張生之忘食、方之斯人、未足爲喻。

毎に曰く、「丈夫 書を擁すること萬卷なれば、何ぞ百城に南面するに假らんや」と。遂に跡を絶ちて幃（『北史』は「帷」に作る）

を下ろし、杜門却掃し、産を棄て書を營む。手自から刪削し、巻の重複無き者四千有餘なり。猶ほ專家に括次し、搜して讜議を比べ、隆冬には曙に達し、盛夏には宵を通ず。（董）仲舒の園を闢せず、君伯の戸を閉じ、高氏の漂を遺れ、張生の食を忘ると雖も、之を斯の人に方ぶるに、未だ喩へと爲すに足らず。

ここでの「杜門却掃」は、単に門扉を閉ざして世間との交際をやめ、自分の住まいをきれいに掃き清めるのみならず、書物の校訂に没頭することを伴っている。秦觀「掩關銘」序の「杜門却掃、以詩書自娛」は、彼自身の独自性を打ち出すものではなく、むしろこのような知識人の閑居の典型に沿って発想されたものであろう。

これまでに見てきたように、詩語としての「掩關」は、住居の門を閉ざして外界との往来を拒絶する意を表すが、閉ざした「關」の内側で学問に励むというニュアンスは含まず、一方、李誦の故事を踏まえる「杜門」は、「却掃」及び学問に励むというニュアンスを含んでおり、秦觀の「掩關」はむしろ「杜門」の表す内容に近いと考えることができる。

さらに言うならば、住居の門や扉を閉ざして外界との往来を拒絶する意の語としては、他に「閉戸」「閉門」があるが、いずれも外界との往来を拒絶して読書や執筆、また詩作に耽る意を伴うものとしてイメージされることが多いようだ。例えば梁・任昉「天監三年策秀才文三首」其二（『文選』卷三十六）の、策問に「問、朕本自諸生、弱齡有志、閉戸自精、開卷獨得。九流『七略』、頗常觀覽。」（問ふ、朕本自ら諸生にして、弱齡にして志有り、戸を閉ちて自ら精し、巻を開きて獨り得るのみ。九流『七略』、頗る常に觀覽す。）とあり、武帝自身が「閉戸」して読書に勤しんだと述懐する表現を用い、さらにこの部分に付された李善注は、『楚國先賢傳』の「孫敬入學、閉戸牖、精力過人、太學謂曰、

閉戸生。入市、市人相語、閉戸生來、不忍欺也。」（孫敬 學に入り、戸牖を閉ち、精力 人に過ぎたれば、太學 謂ひて曰く、閉戸生と。市に入るに、市人 相ひ語るに、閉戸生來たれり、欺くに忍びざるなりと。）を引用しており、ここでは戸や窓を閉じて学問に打ち込んだ孫敬が太學で「閉戸生」と呼ばれている。

また、「閉門」して詩作に耽る例としては、黃庭堅「病起荆江亭即事十首」詩其八（『宋黃文節公全集正集』卷九）の「閉門覓句陳無己、對客揮毫秦少游。正字不知溫飽未（一作『味』）、西風吹淚古藤州。」（門を閉ちて句を覓むるは陳無己、客に對して毫を揮ふは秦少游。正字は知らず溫飽の未（一に「味」に作る）、西風 涙を吹く 古の藤州。）を挙げるができるが、ここでは「閉門覓句」するのは陳師道であり、秦觀は客人と相對して筆を揮うとされている。

（四）「掩關」の効用

このように、秦觀「掩關銘」の序では、この「掩關」を読書に勤しむ機会として説明していたが、次に、彼がこの閑居をどのように位置づけているのかを銘の本文から捉えたい。

まず前半部分では、彼の閑居について次のように説明している。

門有衡衢兮蹄踵聯、世不我謀兮地自偏。渾沌是師兮機械焚、何以玩心兮有討論。挿架萬軸兮星宿懸、口吟目披兮遊聖賢、偶與意會兮欣忘餐。植芳樹美兮亦既蕃、執耒搏虎兮更衆難、自嚴不迷兮邈考槃。門に衡衢有りて蹄踵 聯なり、世は我と謀らずして地は自ら偏れり。渾沌は是れ師にして機械は焚かれ、何ぞ玩心を以て討論すること有らんや。挿して萬軸を架して星宿懸かり、口は吟し目は披きて聖賢と遊び、偶ま意と會せば欣びて餐するを忘る。芳を植え美を樹えてまた既に蕃く、耒を執り虎を搏ちて衆の難を更へん。自ら嚴べ 迷

はずして考槃をう選ぶ。

『箋注』一〇九八頁が指摘するように、この部分では陶淵明「飲酒二十首」詩其五（『陶淵明集』卷三）「心遠地自偏」（心遠く地自ら偏れり）、『莊子』應帝王篇で万物を内包する原初的な無秩序を象徴的に表す存在である「渾沌」、韓愈「送諸葛覺往隨州讀書」詩（『韓昌黎詩繫年集釋』卷十二）「挿架三萬軸」を踏まえて蔵書の多さを言う「挿架萬軸」、さらに再び陶淵明「五柳先生傳」（『陶淵明集』卷六）の「好讀書、不求甚解、每有會意、便欣然忘食。」（書を読むを好み、甚しくは解するを求めず、毎に意に會すること有るに、便ち欣然として食を忘る。）を踏まえて、讀書への耽溺を言う表現を重ね、自らの閑居が、世間との交わりを絶つて個人的な生活の中での自足を求めた陶淵明の閑居を意識し、万物を内包する原初的な無秩序にまで到達することを志向し、星座のように連なる大量の蔵書により古の聖人賢者に親しむことを目指すものであると述べている。ここでも彼の閑居の志向の大きな部分が讀書によって占められているとされており、これは既に見た序や当時彼が周囲の人々に書き送った書簡の記述と符合するものである。

さらに「植え込んだ芳しく美しい草木はもうすっかり繁った、鋤を手にして虎を打ちこらし多くの人々の困難を改めよう。」と秦觀は述べる。しかし彼はこれから扉を開いて人々の救済に向かおうと言っているのではなく、覆い隠された事柄を調べて明らかにし、迷うことなく、『詩』衛風「考槃」が描いているような、世を憂える隠者となることを願っている。

ここで言及されている『詩』衛風「考槃」は、その小序に「刺莊公也。不能繼先公之業、使賢者退而窮處。」（莊公を刺するなり。先公の業を繼ぐ能はず、賢者をして退きて處に窮らしむ。）とあり、また、孔穎達の

疏に「作『考槃』詩者、刺莊公也。刺其不能繼其先君武公之業脩德任賢、乃使賢者退而終處於澗阿。故刺之言。」（『考槃』詩を作れる者は、莊公を刺するなり。其の先君武公の徳を脩め賢を任ずるを業とするを繼ぐ能はず、乃ち賢者をして退きて終に澗阿に處らしむるを刺す。故に之を刺して言ふ。）とあるように、伝統的な解釈では、君主が先代の施政を繼承できず、賢者を在野のまままで終わらせることを批判したものとされる。これはそのまま、当時の、神宗の信任を得た新法を推進する勢力が伸長し、これと対立する旧来の方法を守ろうとする人々が中央を終われつつあった状況、さらには秦觀自身が進士科に及第できない状況と重なるものであろう。

また「考槃」の第一章は、「考槃在澗、碩人之寛。獨寐寤言、永矢弗諼。」（槃しみを考して澗に在るは、碩人の寛なり。獨り寐ね寤めて言ひ、永く諼れざるを矢ふ。）であり、鄭玄箋は、この「考槃在澗、碩人之寛。」を、「有窮處成樂在此澗者、形貌大人而寬然有虚乏之色。」（處に窮して樂を成し此の澗に在る者有り、形貌大人にして寬然として虚乏の色有り。）と、捨て置かれた賢者がここでの閑居を楽しみ、ゆったりとして何事にもこだわらない様子を表現するものと解している。さらに「獨寐寤言、永矢弗諼。」については、「在澗獨寐覺而獨言、長自誓以不忘君之惡、志在窮處、故云然。」（澗に在り獨り寐覺して獨り言ひ、長く自ら君の惡を忘れざるを以て誓ひ、志は處に窮するに在り、故に然く云ふ。）と箋し、君主の惡政を批判しつつ、処士として生涯を送ることを誓うものと解している。秦觀の「掩關銘」はこれを意識して制作されたものであろう。

「掩關銘」の続く部分では、彼の世の中に対する見方が示される。

寔民多艱兮戒求全、高明家室兮鬼笑喧、速成亟壞兮理則然。蔓蔓荊

棘兮上造天、寔磨牙兮交術阡、勿應其求兮銜深冤。

寔^あ民 艱^あきこと多くして全きを求むるを戒め、高明の家室にして鬼は笑喧し、速く成れば亟^{すみや}かに壞るるは理なれば則ち然り。蔓蔓たる荊棘は上りて天に造り、寔磨牙は牙を磨きて術に交はる。其の求めに應ふること勿かれ深き冤を銜まん。

「人々には艱難が多い」は『楚辭』『離騷』を、「完璧であろうと求めて譏りを受ける」は『孟子』『離婁』を踏まえ、いずれも世の中で生きていくことの困難を言うものである。また、揚雄「解嘲」を踏まえた「権勢家の邸をのぞき込んで鬼が笑う」、また、あわてて完成されたものがすぐに壊れてしまうのは理の当然だというのは、彼を及第させず彼に近しい人々を排除しようとする現政権を遠回しに揶揄するものだろう。さらに、伸び広がった荊棘が天までとどき、寔磨牙（『山海經』海内南經に記される龍の頭をした人を食う獣）が牙を磨いて路上を行き交っているとは、新法を推進する勢力が席卷している社会のありさまを批判するものであり、これに対して彼は、「その求めに應えるな、深い罪を得ることになるだろう。」と警戒する態度を見せている。結局、秦觀はこの段で、自らの閑居を単なる逃避ではなく、社会への批判を含むものとして説明しようとしているのである。

かくして、この「掩關銘」は次のように終結する。

掩關自娛兮解憂患、啜菽飲水兮顔悅歡、優哉游哉兮聊永年。

關を掩ひ自ら娯みて憂患を解き、菽を啖り水を飲みて顔は悦歡し、優なるかな游べるかな聊か年を永くせん。

扉を閉じてみずから楽しみ、思いのままにならない世の中の様々な愁いや煩いから解き放たれ、質素な生活を楽しみ、ゆったりと気の向くままに長生きしよう。秦觀は閑ざされた扉の中での自由を楽しもうとして

いる。

秦觀の「掩關」は、この語が従来持っていた社会との応接を拒絶する隠者の態度に倣う姿勢を示し、同時に自分をこのような状況に置く現実社会への批判を含みながら、社会との応接を拒んだ個人的空間での生活や読書を楽しむものとするものである。「掩關」中に著作が進捗することは白居易「閉關」詩にすでに表現されていたが、秦觀の場合は、成果として様々な書物からえり抜き、文章を集めた『精騎集』と見聞を記録した『逆旅集』を編纂している。これらの書物そのものはすでに失われているが、秦觀自身による序文、「精騎集序」（『淮海集箋注』後集卷六）・「逆旅集序」（『同』卷三十九）が残されており、「掩關」生活が彼の思考や感覚に大きな影響を与えことを推測させる。

貢舉への及第が叶わず高郵に留まっていた頃の秦觀にとっての「身」と「世」は、白居易のように心地よい閑居において忘れ去られるものでも、蘇軾のように両者の乖離した状態を諦念を含んで了解するものでもなく、ぼんやりとして見通しのきかない頼りなさや不安を感じさせるものであった。そのような状態にある彼にとって、閉ざした扉の内側は、社会から、そしてそれと対比して意識される自分自身の現実からも逃れることのできる安心できる場所であつたのではないだろうか。そのような「世」からも「身」からも解放される場所である「掩關」の内側で彼は自由を得、古今の書物に親しむことができたのであろう。

中唐の白居易から蘇軾らの世代までの詩文に表現される閑居が、官僚としての公的存在としての自分と個人としての自分との区別を意識しつつ、明るく楽しむべきものとして描かれることが多いのに比して、すでに検討した黄庭堅の場合も含んだ秦觀らの世代の詩文に表現される閑居は、修養としての色合いを強めるとともに、生き生きとした楽しさを陰

らせていくようだ。これは彼らの世代が政府内の党派対立の影響を前の世代よりも若年から被り、貢舉への及第の困難をはじめ任官においても前世代に比して低い地位に止まらざるをえなかったことにより、自己実現が難しい状況にあったことが関係しているのではないだろうか。彼らの世代の独自の感覚について、さらに検討を進める必要があるだろう。

【注】

- 1 〔清〕倪璠注、許逸民校點『庾子山集注』中國古典文學基本叢書、中華書局、一九八〇年
- 2 〔宋〕李壁注『王荊文公詩李壁注』上海古籍出版社、一九九三年
- 3 富壽孫標校『范石湖集』中國古典文學叢書、上海古籍出版社、二〇〇六年
- 4 『高校通信・国語』三一七、東京書籍、一九九一年十一月、のちに『詩人と造物—蘇軾論考』研文出版、二〇〇二年、二百四十三頁〜二百五十二頁
- 5 『文選 附考異』藝文印書館、一九八九年
- 6 『中國文學報』第四十一冊、一九九〇年、のちに『終南山の変容—中唐文学論集』研文出版、一九九九年、二百八十八〜三百三十四頁
- 7 本稿では秦觀の詩文の底本として徐培均箋注『淮海集箋注』（上海古籍出版社、一九九四年）を使用し、作品の制作年代は徐培均著『秦少游年譜長編』（中華書局、二〇〇二年）によった。また、周義敢・程自信・周雷編注『秦觀集編年校注』（新注古代文學名家集、人民文學出版社、二〇〇一年）も適宜参照した。
- 8 徐鵬校點『陳子昂集』修訂本、中國古典文學叢書、上海古籍出版社、二〇一三年
- 9 〔清〕王琦注『李太白全集』、中國古典文學基本叢書、中華書局、一九七七年
- 10 〔清〕馮星實輯訂『蘇文忠公詩合註』中文出版社、一九七九年
- 11 錢仲聯集釋『韓昌黎詩繫年集釋』中國古典文學叢書、上海古籍出版社、一九八四年
- 12 『白氏文集』四部叢刊本（七十卷本）
- 13 朱金城箋校『白居易集箋校』中國古典文學叢書、上海古籍出版社、一九八八年
- 14 『王黃州小畜集』四部叢刊本
- 15 傅平驥・胡問濤校注『蘇舜欽集編年校注』巴蜀書社、一九九一年
- 16 中華書局編輯部編『宋元方志叢刊』第一冊、中華書局、一九九〇年
- 17 吳洪澤・尹波主編『宋人年譜叢刊』第五冊、四川大學出版社、二〇〇三年
- 18 遼欽立校注『陶淵明集』中華書局、一九八七年
- 19 『魏書』中華書局、一九七四年
- 20 『北史』中華書局、一九七四年
- 21 劉琳・李勇先・王蓉貴校點『黃庭堅全集』四川大學出版社、二〇〇一年